

雀

太宰治

青空文庫

この津軽へ来たのは、八月。それから、ひとつきほど経って、私は津軽のこの金木町から津軽鉄道で一時間ちかくかかって行き着ける五所川原ごしょがわらという町に、酒と煙草を買いに出かけた。キンシを三十本ばかりと、清酒を一升、やつと見つけて、私はまた金木行の軽便鉄道に乗った。

「や、修治。」と私の幼名を呼ぶ者がある。

「や、慶四郎。」と私も答えた。

加藤慶四郎君は白衣である。胸に傷痕しょうい軍人の徽章きしょうをつけている。もうそれだけで私には万事が察せられた。

「御苦労様だったな。」私のこんな時の挨拶あいさつは甚はなはだまずい。しどろもどろになるのである。

「君は？」

「戦災というやつだ。念いりに二度だ。」

「そう。」

向うも赤面し、私も赤面し、まごついて、それから、とにかく握手した。

慶四郎君は、私と小学校が同クラスであつた。相撲がクラスで二ばん目に強かつた。一ばん強かつたのは、忠五郎であつた。時々、一位決定戦を挑み、クラスの者たちは手に汗握つて観戦するという事になるのだが、どうしてもやはり忠五郎に負ける。慶四郎君は起き上り、チョツと言つて片足で床板をとんと踏む。それが如何にも残念そうに見えた。その動作が二十幾年後の今になつても私には忘れられず、慶四郎君と言えはその動作がすぐ胸中に浮んで来て、何だか慶四郎君を好きになるのである。慶四郎君は小学校を卒業してから弘前の中学校に行き、私は青森の中学校にはいった。それから慶四郎君は、東京のK大学にはいり、私も東京へ出たが、あまり逢う事は無かつた。いちど銀座で逢い、その時私はちつともお金を持つていなかったので、慶四郎君の御ちそうになつてしまった。それきり逢わない。何でも、K大学を卒業してから東京の中学校の教師をしていたとかいう事を風の便りに聞いた。

「しかし、まあ、よかつたね。」と私は、少しも要領を得ない事を言つた。何と言つたらいいか、わからないのである。

「うん、よかつた。」と慶四郎君は、平気で応じて、「もう少しで死ぬとこでしたよ。」
「そうだろう、そうだろう。」と私は少し狼狽氣味でうなずき、ポケットからいいの買

つて来たばかりの煙草をとり出し、慶四郎君にすすめた。

「いや、駄目なんだ。」と慶四郎君は断り、「これだ。」と言つて白衣の胸を軽く叩く。
とたんに、発車。

「そうか。酒はどうだい。酒もあるぜ。」と私は足もとの風呂敷包をちよつと持ち上げて見せる。「肺病には煙草は、いけないが、酒は体質に依つてはかえつて具合のいいことがある。」

「飲みたいな。」と慶四郎君は素直に答えて、「何もう胸のほうは、すっかりいいんだけど、でもね、煙草はどうも咳せきが出ていけない。酒ならいいんだ。イトウで皆とわかる時にも、じゃんじゃん飲んだよ。」

「イトウ？」

「そう。伊豆の伊東温泉さ。あそこで半年ばかり療養していたんだ。中支に二年、南方に一年いて、病気でたおれて、伊東温泉で療養という事になったんだが、いま思うと、伊東温泉の六箇月が一ばん永かつたような気がするな。からだが治つて、またこれから戦地へ行かなくちやなんのかと思つたら、流石さすがにどうも、いやだったが、終戦と聞いて実は、ほつとしたんだ。仲間とわかる時には、大いに飲んだ。」

「君がきよう帰るのを、君のうちでは知っているのか。」

「知らないだろう。近く帰れるようになるかも知れんという事は葉書で言つてやつて置いたが。」

「それはひどいよ。妻子も、金木の家へ来ているんだらう?」

「うん、召集と同時に女房と子供は、こつちの家へ疎開^{そかい}させて置いた。なあに、知らせるに及ばんさ。外国土産^{みやげ}でもたくさんあるんらしいけど、どうもねえ、何もありやしないんだ。」と言つて、顔をそむけ、窓外の風景を眺める。

「これを持って行き給え。ね、これは上等酒だとかいう話だよ。持って行き給え。金木にもね、いまはお酒はちつとも無いんだよ。これを持って行って、久し振りで女房のお酌^{しゃく}で飲むさ。」

「君のお酌なら、飲んでもいいな。」

「いや、僕は遠慮しよう。細君から邪魔者あつかいにされてもつまらない。とにかくこれは持つて行つてくれ。君がきよう帰るといふ事を家に知らせていないとすると、君の家では、きようはお酒の支度^{したく}が出来ないにきまつている。君は、お酒を飲みたいんだらう? どうも、さつきからこの風呂敷包を見る君の眼がただ事でなかったよ。飲みたいに違ひな

いさ。持つて行き給え。そうして、みんな飲んでしまつてくれ。」

「いや、一緒に飲もう。今夜、君がこれをさげて僕の家へ遊びに来てくれたら、一ばん有難いんだがな。」

「それは、ごめんだ。それだけは、まっぴらだ。二、三日経つてからなら。」

「じゃあ、二、三日経つてからでもいいから遊びに来てくれ。この酒は要らないよ。僕の家にだつてあるだろう。」

「無い、無い。金木にはいま、まるつきり清酒が無いんだ。とにかくきようは、この酒を君が持つて行かなくちやいけない。」

私たちは金木駅に着くまで、その一升の清酒にこだわつた。

結局、そのお酒は慶四郎君が持つて行く事になったが、そのかわり、私も二、三日中に慶四郎君の家へ遊びに行かなければならなくなつた。

そうして約束どおり私は三日後に、慶四郎君の家を訪ねたのであるが、彼は私の贈つた清酒一升には少しも手をつけずに私を待っていてくれた。私たちは早速さっそくその一升を飲みはじめ、彼の大柄でおとなしそうな細君にも紹介せられ、また十三の男の子をかしらに、三人の子供も見せてもらった。

そうしてその夜、私は次のような話を彼から聞いた。

中支に二年、南方に一年いたが、いま思うとまるでもう遠い夢のようで、それにまた、兵隊として走り廻っているのが、この自分では無いような気がして、あの当時の事は、まったく語りたくない。語っても、嘘うそをついているような気がしていけない。それよりも僕には、伊東温泉の半年のほうが、ずっと永くて、そうして自分というこの重苦しい人間の存在が、まごうかたなく生きて動いている感じで、悲しみも喜びも、自分の皮膚にしみ込んで来るような思いがして、僕の三年半の兵隊生活のうちで、君たちに語りたいのは、その最後の六箇月間の療養生活に就ついてだけのような気がする。やっぱり日本人は、内地から一步外へ出ると、自己喪失とでもいうのか、ふわりと足が浮いて生活を忘れ、まるで駄目になってしまふ宿命を負っているのではないかしら。内地では、二、三時間汽車に乗っても、大旅行の感じでもとても気疲れがするのだが、外地では十時間二十時間の汽車旅行なんて、まるで隣村へ行くくらいの気軽なものなのだからね。内地の生活の密度が濃いとでもいうのか、または、その密度の濃い生活とぴったり噛み合う齒車が僕たちの頭脳の中にあつて、それで気持の弛緩しかんが無く一時間の旅でもあんなに大仕事のように思われて来るの

かね。とにかく、伊東の半箇年は永くて、重苦しく、たつぷりしたものだ。いろいろな思い出がある。その中でも、おそらくこれから十年経っても二十年経っても、いや僕の死ぬまで決して忘れる事が出来ないだろうと思われる妙な事件が一つある。それを話そう。

あれはもう初夏の頃で、そろそろれの中小都市爆撃がはじまって、熱海伊東の温泉地帯もほどなく焼き払われるだろうということになり、荷物の疎開やら老幼者の避難やらで悲しい活気を呈していた。その頃の事だが、^あ或る日、昼飯後の休憩時間に、僕は療養所の門のところ立ってぼんやり往來を眺めていた。日でり雨というのか、お天氣がよいのに、こまかく金色に光る雨が時々ぱらぱらと降って来る。^{つばめ}燕が、道路に腹がすれすれになるくらいに低く飛んで飛び去る。僕はあの時、何を考えていたのだろう。道の向う側の黒い板塀の下に一株の紫陽花^{あじさい}が咲いていて、その花がいまでもはつきり頭に残っているところから考えると、^{ある}或いは僕はそのとき柄にもなく旅愁に似たセンチメンタルな氣持でいたのかも知れないね。

「兵隊さん、雨に濡^ぬれてしまいますよ。」

療養所のすじむかいに小さい射的場があつて、その店の奥で娘さんが顔を赤くして笑っている。ツネちゃんという娘だ。はたちくらいで、母親は無く、父親は療養所の小使いを

している。大柄な色の白い子で、のんきそうにいつも笑って、この東北の女みたいに意地悪く、男にへんに警戒するような様子もなく、伊豆の女はたいていそうらしいけれど、やっぱり、南国の女はいいね、いや、それは余談だが、とにかくツネちゃんは、療養所の兵隊たちの人気者で、その頃、関西弁の若い色男の兵隊がツネちゃんをどうしたのこうしたのという評判があつて、僕もさすがにムシャクシャしていた。いや、君のようにそう言つてしまえばおしまいだけど、べつに僕は那時ツネちゃんの事を考えて、日でり雨を浴びて門の傍に佇^たんでいた、というわけでもないんだよ。いや、そうかも知れない。幽^{かす}かに射的場のほうを意識して、僕は紫陽花を眺めたりしてポオズをつけていたのかも知れない。しかし、僕はまさか、ツネちゃんに恋いこがれて、ツネちゃんの射的場へ行こうかどうかどうしようかと、門のところで思い迷つていたというわけでは決してない。だいいち君、僕たちはもう、そんなとしてもないじゃないか。本当に僕はその時、ぼんやり門の傍に立っていただけなんだ。けれども、僕は前からツネちゃんをきらいじゃなかったし、それにどうもあの色男との噂^{うわさ}が気になつていたのも事実だったから、全くツネちゃんの射的場を度外視して、門のところに立っていたと言つてもやつぱり嘘になるかも知れないね。人間の心というのは、君たちの書く小説みたいに、あんなにはつきり定っているものでなく、実際は

もつとぼんやりしているものじゃないのか。殊ことにも男と女の間の気持なんてその場その場の何かのきっかけで、意外な事になったりなんかするもんだからね。ひやかしちやいけな。君にだって経験があるだろう。好きもきらいも、たわいないものだよ。とにかく僕は、ツネちゃんに声をかけられて、それから、のこのこツネちゃんの射的場に行つたのだ。

「ツネちゃん、疎開しないのか。」

「あなたたちと一緒によ。死んだって焼けたって、かまやしないじゃないの。」

「すごいものだね。」

と僕は言うより他は無かつた。こりやてつきり、ツネちゃんもあの関西弁と出来ちやつた、やぶれかぶれの大情熱だと僕は内心ひそかに断定を下し、妙に淋さびしかつた。

「雀すずめでも撃つて見ようかな。」と言つて僕は空氣銃を取りあげた。

その射的場で、一ばんむずかしいのは、この雀撃ちという事になっている。ブリキ細工の雀が時計の振子のように左右に動いているのを、小さい鉛なまりの弾で撃つのだ。尻尾しっぽに当たっても、胴に当たっても落ちない。頭の口くちばしに近いところを撃たなければ絶対に落ちない。しかし僕は、空氣銃の癖を呑み込んでからは、たいてい最初の一発で、これをしとめる事が出来るようになっていた。

ツネちゃんが箱のねじを巻くと、雀は、カッタンカッタンと左右に動きはじめる。僕はねらいをつけた。引金をひく。

カッタンカッタン。

当然なのだ。

「どうしたの？」とツネちゃんは、僕がたいてい最初の一発でしとめるのを知っているの
で、不審そうな顔をしてそう言う。

「どいてくれ、お前が目ざわりでいけないのだ。」と僕は下手な冗談を言う。どうも東北
人は、こんな時、猿も筆のあやまりなんて、おどけた軽い応酬が出来なくて困るよ。

事実、どうにも目ざわりだったのだ。ツネちゃんは僕たちが射撃をはじめると、たいて
い標的のあたりにうろうろしていて、弾を拾ったり、標的の位置を直したりするのだが、
いつもはそんな目ざわりなんて思った事は無かった。しかしその時は、雀の標的のすぐ傍
に立って笑っているツネちゃんが、ひどく目ざわりで危なかしくていけなかった。

「どけ、どけ。」と僕は無理に笑って、重ねて言った。

「はい、はい。」

ツネちゃんは笑いながら一尺ばかりわきへ寄る。

僕はねらいをつける。引金をひく。ブスと発射。

カッタンカッタン。

当たらないのだ。

「どうしたの？」

とまた言う。

僕は、へんに熱くなつて来た。黙つて三発目の弾をこめてねらう。ブスと発射。

カッタンカッタン。

当たらない。

「どうしたの？」

さらに四発目。当たらない。

「ほんとうに、どうしたの？」と言つて、ツネちゃんはしゃがんだ。

僕は答えず五発目の弾をこめる。しゃがんでいるツネちゃんのモンペイの丸い膝ひざがこんもりしている。この野郎。もう処女ではないんだ。

いきなりブスとその膝を撃った。

「あ。」と言つて、前に伏した。それからすぐに顔を挙げて、

「雀じゃないわよ。」と言った。

僕はそれを聞いて、全身に冷水をあびせられたような気がして立ちすくんだ。悪かった悪かった、悪かった、悪かった、千べん言っても追いつかないような気がした。雀じゃないわよ、という無邪気な一言が、どのような烈しい抗議よりも鋭く痛くこたえた。ツネちゃんは顔をしかめ、しゃがんだまま膝小僧をおさえ、うむと呻いた。おさええた手の指の間から、血が流れ出て来た。僕は空気銃をほうり出し、裏から廻って店の奥にはいり、

「ごめんごめん、ごめん。どうした？」

どうしたもこうしたも無い。鉛の弾が膝がしらに当って、よほどの怪我をしたのにきまっている。立てない様子だ。僕はちよつと躊躇したが、思い切ってうしろから抱いて立たせた。ツネちゃんは、あいたたと言って膝頭から手を放し、僕のほうに顔をねじ向け、「どうするの？」と小声で言って、悲しそうに笑った。

「療養所で手当をしてもらおう。」と言った僕の声は囁れていた。

ツネちゃんは歩けない様子であった。僕は自分の左脇にかかえるようにしてツネちゃんを療養所に連れ込み、医務室へ行った。出血の多い割に、傷はわずかなものだった。医者は膝頭に突きささっている鉛の弾を簡単にピンセットで撮み出して、小さい傷口を消毒し

繃帶ほうたいした。娘の怪我を聞いて父親の小使いが医務室に飛び込んで来た。僕は卑屈へいきつなあいそ笑いを浮べて、

「やあ、どうも。」と言った。僕は、自分が本当に悪いと思っなていると尚なさら、おわびの言葉が言えなくなるたちなのだ。

その時の父親の眼つきを、僕は忘れる事が出来ない。ふだんは気の弱そうな愛嬌あいきようのいい人であつたが、その時、僕の顔をちらと見た眼つきは、憎悪と言おうか、敵意と言おうか、何とも言えない実におそろしい光りを帯びていた。僕は、ぎよつとした。

ツネちゃんの怪我はすぐ治つて、この事件は、べつだん療養所の問題になる事もなく、まあ二三の仲間にひやかされたくらいのものですんだのであるが、しかし、僕の思想は、その日の出来事で一変せられたと言つてよい。僕はその日から、なんとしても、もう戦争はいやになった。人の皮膚に少しでも傷をつけるのがいやになった。人間は雀すずめじゃないんだ。そうして、わが子を傷つけられた親の、あの怒りの眼つき。戦争は、君、たしかに悪いものだ。

僕はべつにサジストではない。その傾向は僕には無かつた。しかし、あの日に、人を傷つけた。それはきつと、戦地の宿酔ふつかよゐにちがいないのだ。僕は戦地に於いて、敵兵を傷

つけた。しかし、僕は、やはり自己喪失をしていたのであろうか、それに就いての反省は無かった。戦争を否定する気は起らなかった。けれども、殺戮さつりくの宿醉を内地まで持つて来て、わずかにその片鱗へんりんをあらわしかけた時、それがどんなに悪質のものであったか、イヤになるほどはつきり知らされた。妙なものだよ。やはり、内地では生活の密度が濃いかからであらうか。日本人というのは、外国へ行くと足が浮いて、その生活が空転するとう宿命を持つているのであろうか。内地にいる時と、外地にいる時と、自分ながら、まるでもう人が違っているような気がして、われとわが股ももを抓つかつてみたくなるような思いだ。

慶四郎君の告白の終りかけた時、細君がお銚子ちようしのおかわりを持って来て無言で私たちに一ぱいずつお酌をして静かに立ち去る。そのうしろ姿をぼんやり見送り、私は愕然がくぜんとした。片足をひきずり気味にして歩いている。

「ツネちゃんじゃないか。」

その細君は、津軽訛りなまの無い純粹の東京言葉をつかっていた。酔いのせいもあって、私は奇妙な錯覚を起したのである。ツネちゃんは、色白で大柄なひとだったそうではないか。「馬鹿、何を言つてやがる。足か。きのう木炭の配給を取りに一里も歩いて足に豆が出来

「たんだとか言っている。」

青空文庫情報

底本：「太宰治全集⁸」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年4月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：もりみつじゅんじ

2000年2月1日公開

2005年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雀

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>